

「恵みと平安」

エペソ人への手紙 1 : 1 - 2

June.27.2021

エペソ人への手紙 1 : 1 - 2 (パウロ)

Preface

エペソ人への手紙を見始めていますが、前回の説教で、エペソ書 1 : 1 節からキリスト・イエスにある聖徒とは何かということについて見ていきました。

そして今朝は、2 節の「恵みと平安があなたがたにありますように」という使徒パウロの挨拶の言葉から、聖書の教える“恵み”と“平安”について考えていきたいと思っております。

新約聖書の約半数が使徒パウロの書いた手紙ですが、その手紙の冒頭部分の挨拶を見ますと、いつも“恵み”と“平安”という言葉から始まっているのが分かります。

“恵み”と“平安”という言葉は、聖書の中にもよく出てきますし、キリスト教用語としてもよく用いられ、頻繁に口にする言葉なので、その深い意味をあまり考えずに使うことが多いのではないかと思います。

しかし、この二つの単語こそ、神の成してくださった救いの業を言い表すのに最も適した言葉であると同時に、最も重要な言葉です。

また、この“恵み”と“平安”という言葉は、神が成してくださった御業を考える上で、決して切り離すことの出来ない密接な関係にある言葉でもあります。

だから、パウロがその手紙の冒頭で、必ず“恵み”と“平安”という言葉セットで使ったのは、何かの習慣のように、または慣用句的に使ったのではなく、この言葉に込められた意味を明確に把握した上で、あえて“恵み”と“平安”という言葉を使っているのが見えてきます。

Part One

まず、“平安”という言葉ですが、ギリシャ語の聖書ではエイレネという言葉で、“平和”を意味する言葉です。

ヘブル語のシャロームにあたる言葉です。

で、この平安、平和という言葉は一般的に、戦争が止み、敵対的關係が小康状態に入ったことや、危険や恐怖が取り除かれた平穏な状態を言い表す言葉ですが、

聖書の言う平安や平和は、それまであった敵対的關係が一先ず落ち着いた程

度のことを意味するのではなく、背を向けていた状態から真正面に向き直し、手を取り合って和解の握手をし、親睦の抱擁をすることをエイレネ、シャロームと言います。

つまり、エイレネとかシャロームという言葉は、一体となる、結びつく、ハーモニーという意味合いを持っている言葉なんです。

ですから、聖書の言う平安とか平和は、戦争をせず互いに攻撃を仕掛けない休戦でもなければ、冷戦状態でもなく、互いに干渉し合わない外面を取り繕ったような状態のことではありません。

和解し、和睦し、一体となって結びついたことを、聖書では平和、平安と言います。

また、“恵み”という言葉ですが、これはある意味、あきらめが込められた言葉でもあります。

つまり、どう表現していいのか分からない、とてつもないものを与えられ手に入れたけれども、そこには私の努力や理解や知識や準備などの入る余地はスズメの涙ほどにもないものを“恵み”と言い現わします。

恵みとしか言い表すことの出来ないものを、仕方なく恵みと表現します。

もっと言いますと、“恵み”と言われる結果を手にすることを願ったこともなければ、願うことさえも知らなかった、関心もなければ、万に一つ願ったとしても、それを手にするものの出来る能力や力は、これっぽっちも持ち合わせていないのに、手にしてしまった、与えられてしまった。

これが“恵み”です。

私という人が入れる余地は、全くないもの、これが恵みです。

そして、この“恵み”として得られたのが“平安”です。

先ほども言いましたように、聖書の言う“平安”とは、和解、和睦を意味する言葉ですが、では、誰との和解、和睦なのか？

唯一の神との和解です。

Part Two

私たち人間は、元来、誰一人として、神との和解を願うこともなければ、和解する必要性も感じなければ、これまた万に一つその必要性を感じたとしても、神と和解する術を私たち人間は、持ち合わせていません。

なぜならば、私たちすべての人間は、悲しいかな純度１００%の悪質な悪党であり、罪人であり、罪を愛している存在だからです。

ヨハネの福音書を見ますと、その事をはっきりと言います。

ヨハネの福音書 ３：１７－１８（パウロ）

今ここだけを読みますと、神が送ってくださった御子イエス様を信じる者は救われ、信じない者は救われないという風に、あたかも救いは私たちの選択にかかっているということを言っているように思えますが、救いが私の選択にかかっているということを言おうとしているではありません。

もし救いが、私という人の選択にかかっているならば、それは恵みではありません。

私の選択いかんによって得られる結果が決まってしまうのならば、私という人の入る余地がない“恵み”にはなり得ません。

今ここで言わんとしていることは、私がイエスを信じるかどうかよりもはるか以前に、神が御子イエス・キリストを、世をお救いになるために遣わしてくださったということが先だということです。

私たち人間誰一人として、自ら進んで神との和解なんかに関心を持ったこともなければ、救いの必要性も感じず、神との和解や救いがあるなんていう事実も知らずに生きています。

そんな有るようで何もない空っぽなところを生きているようで死んでいる私たち人間のために、御子イエス・キリストを、神は先に遣わしてくださいました。

続けて１９節を見てみましょう。

ヨハネの福音書 ３：１９（パウロ）

出ました。

私たちすべての人々は、光よりも闇を愛す純度１００%の悪人であり、悪党であり、罪人です。

あの人、この人ではなく、私という人が、光よりも闇を愛す純度１００%の悪人であり、罪人です。

元来、神を求めたことなんかありませんし、もし神という存在があったとしてもそれは、私の欲望や願望を満たすための道具や手段でしかありません。

なので当然、光であられる御子キリスト・イエスを、自ら進んで選び取ることもなんてしません。

イエス・キリストを選び取れない人々が、新約聖書の中にはたくさん登場して

きますが、自ら進んでイエス・キリストを選び取った人も誰一人として出てきません。

イエス様を慕って従っていたはずの12弟子たちのみならず、何千人といたすべての弟子たちは、イエス様から逃げて行き、すべての人々が主イエス様を十字架につけました。

イエス様が光であられるということを感じながらも、イエス様を十字架に架けました。

イエス様を十字架に架けずにはいられない、光よりも闇を愛する習性が出てしまっても、そんな屈辱的な習性が自分の内にあるなんてことを認めることも出来ません。

例えば、イエス様の十字架を描いた映画や映像を見て、「なんて惨たらしいことをしているんだ！」と涙を流しながら、「許せない！」なんていう思いを抱く自分自身のことを「あの人たちとは違う」と思い込んでしまうほどに、私達人間は完璧な偽善者であり、悪人です。

完璧という言葉は、本来、私たちが悪人であり、罪人であるということを言い表す時に使う時こそ、完璧な使い方になるのかもしれないほどに、私たちは完璧な偽善者であり、悪人であり、罪人です。

私たちは、光よりも闇に魅力を感じます。

そんな私たちが、光であられるイエス様を先に選び取って、救いを得るなんていうことはあり得ません。

Part Three

ヨハネの福音書1：3－5（パウロ）

今ここでヨハネは、イエス様のことを光だと言います。

ヨハネはヨハネの福音書を書くにあたって、創世記1章の天地創造の記述を念頭に置きながら書いていますが、その中でも、創世記1章3節の「光、あれ。」と神がおっしゃったあの光の本質、本体こそ、イエス・キリストであられ、すべての被造物をお造りになった神そのお方であられるということを言いたいわけなんです。

イエス・キリストこそ、すべての物事、物質の根幹であられるにもかかわらず、その光であられるイエス・キリストを誰一人として理解できませんでした。

ヨハネ1：5の

ヨハネの福音書1：5（パウロ）

闇はこれに打ち勝たなかった。

という御言葉の別訳が聖書の欄外にあります。

「これを理解しなかった」とありますが、正に、この別訳の通りですね。

闇を愛する習性を生まれながらにして持っているすべての私たち人間は、物質的な光には、闇夜に照らされたランプに吸い寄せられていく虫たちのように惹かれていきますが、まことの光であられるイエス・キリストのことは、全くもって理解できません。

ヨハネの福音書 1：9－11（パワポ）

誰も彼も、皆が皆、一切合切、後にイエス様の恵みゆえに救いに与る者たちでさえも、自ら先に、光であられるイエス様を受け入れる者なんかいません。

だから、恵みなんです。

救いとは、私たちが先に神の側に付いたからとか、私たちが先に主イエス様を選び取ったから成されるものではありません。

イエス様が必要だということも知らず、イエス様を自分の意志で選び取るわけでもない私たち罪人のために、先にイエス様が死んでくださり、

イエス様の味方になったこともない者のために、その罪を洗い流し、聖めてくださったことゆえに、ただただ与えられたのが救いです。

「イエス様を信じれば救われます」と言いますが、私たちが信じるのが先ではありません。

信じる事が出来るように、信じることを選び取ることが出来る自由を私たちに施すために、神が犠牲を払い、準備してくださったのが先です。

また、信じると決心することさえも、私の選択ではありません。

なぜなら、光よりも闇を愛す者たちだからです。

信じるという選択さえも、選択する自由さえも、私の努力に依らず、私の熱心にもよらない、ただただ神の恵みです。

神の恵みなんです。

私たちの努力、思考、作戦、理解によらず、ただ恵みです。

私たちは、神の恵みを着せられた者たちですね。

Part Four

そして、その恵みゆえに、神との和解という、まことの平和に入れられました。

そこで初めて悟られる重大で深刻な事実が、それまで神と敵対関係にあつ

た身分だということと、

その神との敵対関係が、主イエス様の懸け橋によって、身代わりによって、犠牲によって、和解へと導かれ、ついに平安を手にしたということです。

ローマ人への手紙 5：6－11（パウロ）

ローマ人への手紙 5：1（パウロ）

この御言葉にある通りのことが、私たちの身に起こりました。

（また、これから起こる方々もおられるでしょう。期待してください。）

では、私たちがかつて、神との平和を持たない頃は、何の奴隷でしたか？
罪の奴隷です。

私たちが私たちの主人ではなく、罪が私たちの主人なので、やることなすことすべてが罪です。

また、誰と不仲だったかと言いますと、神様と不仲でした。

もっと言いますと、神様の存在なんか知らないわけですから、神様と不仲だっ
て言うことさえも知らなければ、認められませんでした。

罪しかないところで生きていました。

しかし、恵みゆえにそこから脱し、神様と和解し、神様との平和に入りました。

すると、今度は誰と不仲になりますか？

罪と不仲になります。

すると、罪にまみれた世界が見え、ある意味、世と不仲になります。

では、世と不仲になり、神様と平和になったならば、世でクリスチャンとして
生きていく時平安があって然るべきですか、イエス様を信じてこの世を生きる
ことに平安がありますか？

それとも頭が痛いですか？

頭が痛いことの方が多いかもしれません。

イエス様を信じると神様との平和が保たれる一方、世の中で生きていますと
ほとほと参ってしまうことがあります。

だからイエス様は、平和についてこんな風にも仰っています。

マタイの福音書 10：34－38（パウロ）

イエス様は、地上に平和をもたらすためではなく、剣をもたらすために来たと
仰います。

これはイエス様が暴君で、暴力的なことを好むということではありません。
その逆です。

世の中が暴君で、暴力的であるために、平和の君であられる主イエスがやること
となすことすべてに対して、暴力的な剣をもって対抗してくると、

また、その剣をもって対抗してくる地上の勢力に対して服従しない覚悟をクリ
スチャンたちは持つ必要があると仰るわけです。

イエス様を信じた後も、なおその覚悟なく、この世と調子を合わせつつ、世に
あって何不自由ない生活を追求するから、ほとほと参り、頭が痛いのです。

キリスト・イエスを信じる以前の私たちは、世と平和を保ち、神と不和でした。

でも、神と不和で、世と平和を保っていたからと言って、そこにまことの平和
や平安があったかと言いますとそんなことはありません。

イエス・キリストなしに、世と共に生き、世と仲良くなればなるほど、不安と
不和が、心と魂とその人生を覆っていきました。

なのに、イエス様を信じて神様との平和を持つようになってからもまだ、世とも平
和を保とうとします。

神との平和を、世で生きるためにどれだけうまい具合に利用し利益を上げる
かが、信仰の戦いになってしまっていて、主イエスが光であられ、創造主であら
れ、その御言葉を守り、伝え、探求し、御言葉を生きるということが信仰の戦い
になっていない私たちの姿があります。

エペソ書 2 章に行ってみますと、世と共に生きる人々について霊的観点から
説明している箇所があります。

Part Five

エペソ人への手紙 2 : 1 - 6 (パウロ)

かつての私たちはどうだったと言いますか？

私たちの背きと私たちの罪の中に死んでいました。

“死んでいた”というのは、神様を知らない状態にあったということです。

いやそれ以上です。

まことの神様を全く知らないで生きていましたので、神様と不仲、不和だった
ということさえも知らなかったということです。

かつての私たちは、この世の流れに従って、空中の権威を持つ支配者、つまり

悪魔やサタンと言われる闇の支配者に、知らない内に載せられて生きていました。

それをここでは、不従順と言います。

誰に対しての不従順ですか？

唯一まことの創造者なる父なる神に対しての不従順です。

また神に対しての不従順とは、自分が神で、自分が王だということです。

即ち、すべての人が自己中心的で、自分が第一です。

人に対する善行や美徳さえも自分の利益のため、人との競争が目の前にあれば負けるわけにはいきません。

徹底して自分の主人は、自分です。

3節の言葉にある通り、「かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い」ながら、自分の思う通りに生きていました。

自分がやりたいことをやりたいようにやり、自分以外の他人は、自分のやりたいことを手助けするための存在でしかありません。

自分こそ神で、それ以外は、みな自分の臣下であることを誰もが望んでいます。

世界中どこに行っても、どの国に行っても、最も多く使われる単語が何かご存知でしょうか？

「私」という単語です。

英語ならば「I」、ドイツ語では「Ich」、中国語ならば「Wo」、韓国語では「Na」日本語では「私」「我」「僕」「俺」「わし」です。

これらの言葉に共通しているのは、みんな短いということです。

世の中どこに行っても、最も多く使う言葉なので短いんです。

そして、「私」という単語に続く言葉として多いのが、「私」以外の人を指す言葉です。

「あなた」「お前」「あいつ」「こいつ」「あの人」「この人」です。

「私はこうだけれども、あなたは、お前は、あいつは・・・」です。

「私はこうなのに、お前ごときが」ということです。

いつでも人と比較する際には、私を大きく、相手を小さくします。

私は寛大で正しい人ですが、相手は暴君です。

そして、すべての人が神になりたがり、自分のやりたいようにやろうとしますが、それがどのような形で表れるのかと言いますと、争いです。

けんかであり、毘であり、悪行であり、行き着くところ戦争を起こします。

小さくは個人同士、大きくは国家同士戦争を起こします。

戦争がなくなる、または戦争に知らず知らずのうちに加担しているどころが、起きている戦争の原因が正に自分であり、自分の罪であることさえも気づいていないということだけで、十分に、もう罪人であることを立証しています。

どの人間も、誰一人として、他の人と完全な平和関係にある人はいません。

「誰かが誰かと仲が良いということは、共通の敵がいるということだ。」という言葉があるほどに、完全な平和関係はありません。

世にあるのは、ただひとつ、ただただ「私」という存在のために、相手を利用し、しもべにすることです。

結局のところ、人間が作り出したすべての宗教も、「私」を神に祭り上げる行為でしかないことが見えてきます。

自分ではできないことを出来る能力があると言われる神々を作り上げて、自分の欲求を叶えるために、何かの呪文のようなものを唱えて、お金でも物でもお供えしたら、必ず、「私」の願いにこたえ、叶えなければなりません。

叶えなければ神とは認めません。

これが人間の作った宗教の実体です。

人は、いつも自分が神で、自分が主人です。

何かを献げ、何かの儀式を行い、その前に跪いたとしても、結局は、その「神」と言われる「何がし」は、一連の手順を通して、「私の欲望」を満たしてくれる私の臣下であり、実質しもべでしかありません。

Part Six

しかし、イエス・キリストは、聖書は、私たちが神に造られた被造物であることと、私たちをお造りになった神こそ、私たちの主人であり父であることを悟らせてくださいます。

だから、エペソ書1章2節のこの言葉が出てくるのです。

エペソ人への手紙1：2（パワポ）

まことの神様を無視して、自分が神だと勝手気ままに生きている私たちに、神様は好意をもってくださり、愛してくださり、お救いになることを何よりも喜ばれ、あり得ない犠牲をお払いになりました。

だから恵みであり、平安なんです。

我が家の子供の成績と進路が、私の昇進と願いが叶えられることをもって、恵

みだというならば、聖書の語る“恵み”をまともに理解していないことになります。

もちろんそれらも恵みでしょうが、二の次三の次のことです。

私たちに与えられた“恵み”をもって、私たちが見失ってはいけないことは、「私という人が誰なのか？」ということです。

私という人の主人は私ではありません。私の人生の決定権も私にはありません。

私の主人は神であり、私の人生の決定権は神にあります。

感謝献金を献げるから商売繁盛させてください、断食祈祷をしますから上手く行くようにしてください、日曜日の礼拝を欠かさずに出席しますから私の訴えを聞いてください、これは、恵みではありません。

神様は、私たちの幸運とか、何かの欲だとか、私たちの夢を叶えるために私たちを導くのではなく、神様と和解し、神様との平和を持ち、神様に結びついて、神様と一体となって、神様が導きたいように導いて行かれるということを覚える必要があります。

商売繁盛せず、物事上手く行かず、訴えも聞かれないことをもって、神様は導き、何が大切で、何が大切ではないのかを教え、納得させ、神様のその深くて広くて、決して言葉では言い尽くせない意図を持っておられることを私たちが賛美できるように導き、世では味わうことの出来ない平和を実感させてくださいます。

Conclusion

コリント人への手紙第二 5 : 14 - 20 (パウロ)

キリストの愛に捕らえられている私たちは、もうこれ以上、私たち自身のために生きません。

もうこれ以上、私という人の主人は、私ではありません。

私のために死なれ、よみがえってくださったイエス・キリストのために生きるんです。

もしそういう生き方が出来ていないならば、せつかく新しく造りかえられたのに、未だに古いものにしがみついて生きているのかもしれない。

古いものとは、自分が王で、自分が王権を振りかざし、自分を信じ、自分の決定と自分の計画によって生きる不従順な生き方です。

キリストにあって新しく造られた者たちのすべてのことは、神から出ています。

私たちの力と私たちの知恵によって出てきたものなんか、何一つないことを実感し、告白し、神を王とし、神を神として生きること、これが新しい生き方です。

そしてそこにあるのが、神との和解と平和を日々実感する生き方です。

今、皆さんが生きているそこに神との和解という平安と平和がありますか？
実感がありますか？

実感がある方は、その実感をどういう風に、生き方に反映していますか？

もし実感が無いならば、神と和解してください。

神様と和解させていただいてください。

いつもでも、どこでも、どんなときでも、神様は和解の手を両手いっぱい広げて、待っておられます。

恵みを受けたいならば、神と和解してください。

神様が皆さんの主人になるようにしてください。

皆さんの思いと考えと欲を脱ぎ捨て、神様が皆さんの内に成し遂げようとしておられることに賛同し、屈服し、服従し、喜びをもって、その方について行く人生を生きる決心をしてください。

そうすればその中で、皆さんは思う存分、勝利を味わうことになるでしょう。

多くの奇跡を経験するでしょう。

皆さんが計画したどんなことよりも、驚くほど素晴らしく、やりがいのある、生きがいのある人生を歩むことになるでしょう。

父なる神と主イエス・キリストの恵みと平安が、皆さんにありますように祈っています。

お祈りいたしましょう。

祝祷：エペソ人への手紙 1：2